

2020 年度

国 語  
(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

次の文章を読んで、後の問いにそれぞれ答えなさい。

「芸術ってなんのためにあるの?」

二つのことが問われている。芸術作品には作り手と受け手がいる。では、なぜ作るのだろうか。そして、なぜそれを求めて受けとるのだろうか。芸術作品は、必ずどこか理解を超えたものをもっている。受け手にとってだけではなく、作り手にとってもそうだ。作り手は、自分の理解をはみ出したものを自ら作り出してしまふ。しかもそれは余分な不要物ではなく、はみ出たそこにこそ、芸術の力と生命とが宿っているように思われる。その力の正体は、何か。

I 山内志朗「感情が表現を求めて荒れ狂う姿が芸術だ」

芸術って何のためにあるのだろう。下準備として芸術って何か考えておかないといけない。芸術は美術館にあるのではなく、身近にあるもので、誰にとっても必要なものだ。決して高尚なものではないし、そうあつてはならない。A、Jポップだって、アニメだって、芸術だ。形に残る必要もない。

高価で売り買いされ、ビジネスの対象になるものが「芸術」と呼ばれているけれど、本当はそうではない。芸術は金儲けのためでも、ヒマつぶしのためのものでもない。人間が人間として存在していくために必要なのだ。

未来と死という、見ることでできない荷物、とても重い荷物を人間は背負っている。長い道の中の、その荷物で腰砕けにならないための支えとして芸術はあると思う。

人間が生きていくことを、歩くことになぞらえると、どういう歩き方になるんだろう。お金や名誉を目指して誰よりも早く進むような駆け足だろうか。アルコールやギャンブルにはまって、ふらふら歩く千鳥足だろうか。誰かが助けてくれるまで起き上がるもしない行き倒れだろうか。自分の失敗を他の人にも味わわせるために足払いをかけ続けることだろうか。

人生は、未来に背中を向けて、後ずさりしていくことと似ている。未来は見る事ができない。背中にぶつかるものが、非難の石つぶてなのか、会場を揺るがす声援なのか、未来に進み、目にする事ができたときにやっとわかる。今は **X** を信じられる者だけが、未来に向かつて後ろ向きに進むことができる。 **Y** を恐れる者は一歩も未来に進めない。

人生とは思っただけで胸をかきむしりたくなる失敗が積み重なっていくことだ。そして表現されない感情は名前と形を求めて暴れ回るのだ。表現せすにはいられない表現衝動、そこから芸術は現れてくる。表現されない限り、感情は名前を持たない。それは、記憶の中に静まることなく、心を苛み続ける。だから芸術は必要なのだ。呪いも歌も踊りも大声も、人々に伝わり、流通する限り芸術と呼んでよい。

芸術は「美」だけを求めるのではない。美とは、心を引き寄せるもので、大事だが芸術の本質ではない。芸術の本質は、事実の中にあるのではなく、事実を越えたところにある。その姿を「美」と呼んでもよいけれど。

押しつぶされそうな悲しみに溢れる涙も、世界中の喜びが自分に集まってきたように感じられる幸せも、「美」であるはずだ。美とは、他者と共有され、伝えられ、社会の中で流通し、共有の財産となつて蓄積されていくものだが、その本質は、ライブの中での表現と感動とのやりとりにある。伝わっていく力こそ「美」である。そういう場面で、人間の情念は、事実を越えてゆくための足場となっていくのだ。事実を踏まえながら、事実を越えていくことこそ、人間存在の本質構造である。事実を越えてゆく力を、事実が与えることはできない。芸術の本領はそこにある。

## II 古莊真敬「生を記念する共同の経験」

「それは何のためのものか」という問いには注意が必要です。時としてそれは「何かのための手段」として役立つものだけを意味あるものと考える性急さをひそませており、「役に立たないもの」を無意味なものとして切り捨てる暴力に変化して、結局、私たちの生活を空っぽで味気ないものにしてしまう恐れがあります。

**B** 私たちの「生」そのものは、「何かのための手段」として外側から意味づけられるものではありません。芸術は、この内側から享受されるほかない生と密接に結びついているのではないでしょう。ちょうど「食べること」が、単なる「生きるための手段」などではなく、生きることと自身の活動のひとつとして、それ自身において味わわれるように、芸術もまた、私たちの生の活動のひとつとして、それ自身の幸福において喜

ばれるものであると言えるのではないだろうか。

なるほどたしかに、他人との比較や競争に明け暮れがちな世間や学校では、音楽や図工の時間も、ちっぽけな優越感や劣等感の材料さがしの時間となりがちで、「芸術の喜び」だなんて綺麗事にすぎないと思われてくるかもしれません。

C、そういう窮屈な比較の空間を離れて、そもそも私たちはどのようなときに歌や音楽にひかれ、自らも声を上げて歌い奏でたくなるものなのか、あるいは一般に、私たち人間を芸術的な表現へと駆り立てるのはどのような欲求であるのかを考えてみましょう。これはなかなか簡単には答えられない難問ですが、ひとつには、過ぎ去りゆく世界の彩り、きらめき、あるいは生きてあることの情感を、ただいたずらに過ぎ去らせたくはないという思いが、およそ「作品」というものを生み出そうとする表現活動の根底にはあると言えるかもしれません。私たちの心には、何か光るものが不意に舞い降りてきた生の瞬間を記念したいという根源的な欲望がひそんでいて、雨の日には雨の雫のきらめきが、晴れた日には青空のもとを吹きすぎていく風の光が、ただいたずらに流れ去ってしまったといううちに、それらを歌の言葉やメロディーや色かたちのうちに留めたいと願わずにはいられないのではないのでしょうか。そんなふうにして、この世に生きてあることの感触や意味を再発見し編み直していくことが、私たちの生を内側から支えているのではないのでしょうか。

そうした芸術的表現の努力には、また、どこか「祈り」にも似た心がこめられることがあるように思われます。ある詩人は、詩とは「壇に入れて海に流す手紙」のようなものではないかと問いかけました。彼は、彼が「あなた」と呼びかける相手のもとに、その手紙が届くことを祈りながら、ひたすら自身の言葉を研ぎ澄ましていきました。私たちも、たまたま出会った作品のなかに思いがけず自分に宛てられた手紙のような言葉が発見することがあるかもしれません。千年前に歌われた歌の響きが、今夜の月の光に重なって見えることもあるでしょう。私たちの命や心の動き自体は、はかなく過ぎ去りゆくものですが、芸術という（秘かな「祈り」をはらんだ）人間の生を記念する共同の経験のなかで、私たちの心は時間と空間の距離をこえて響きあい幾重にも編み直されていくようです。それもまた、「芸術の喜び」と言えるのではないのでしょうか。

（野矢茂樹 『子どもの難問』より一部改変）

（注1） 高尚…程度が高く、上品なこと。

（注2） 苛み…いじめる。ひどく当たること。

（注3） 享受…受け取ること。味わい楽しむこと。

問一 — 線①「芸術って何か」とありますが、Iの文ではそれはどのようなものだと書いていますか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人が人生という長い道の中で腰砕けにならないためのもの。

イ 美術館にあるものや、高尚なものではなく、形にも残らないもの。

ウ 未来と死という見ることのできない荷物を背負って生きていく人間の生を支えていくもの。

エ 高価で売り買いされ、ビジネスの対象となるものではなく、身近にあるもの。

オ 誰にとっても必要であり、人間が人間として存在していくために必要なもの。

問二 — AとCに入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号

は一度しか使えません。)

ア あるいは イ なぜなら ウ でも エ そもそも

オ だから カ もし

問三 — XとYに入る語句の組み合わせとして、もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア X 見えるもの Y 見えるもの

イ X 見えないもの Y 見えるもの

ウ X 見えるもの Y 見えないもの

エ X 見えないもの Y 見えないもの

問四 — 線②「それ」とは何か。八字でぬき出し答えなさい。

問五——線③「芸術の本領はそこにある」とはどういうことですか。五十字以上七十五字以内で説明しなさい。

問六——線④「私たちの生を内側から支えている」とあるが、どうすることによって支えているのですか。文中の言葉を使って、五十字以上七十五字以内で答えなさい。

問七——線⑤「芸術の喜び」とは何ですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身の生の記念である芸術を、多くの人の手に渡ることを祈りながら、芸術の作り手が、自分の言葉を研ぎ澄ましていく喜び。

イ 作り手の生の記念である芸術的表現を受け取ることで、作り手の生きている感触や意味を、自分自身の生と重ねあわせ、自分の心を編み直すことができる喜び。

ウ 芸術とはまるで「壇びんに入れて流す手紙」のように祈りにも似た偶然の産物であり、生の記念を偶然ぐうぜんにも記録し表現できるという思わぬ喜び。

エ 私たちが、生きているその瞬間の生の記念を芸術として表現をすることによって、自分の人生を幾重いくえにも編み直すことができる喜び。

オ 他者の生の記念である芸術と、自分の人生や心を響かせあうことで、生の記念である芸術を新たに編み直していくことができる喜び。

問八 本文「I」では次の一文がぬけています。どこに入ればいいですか。その直後の五字をぬき出し、答えなさい。

しかし、芸術はそういう歩き方と別のところにある。

問九 } 線「では、なぜ作るのだろう。そして、なぜそれを求めて受けとるのだろう」とありますが、その答えとして本文で述べられているものには「○」、「述べられていないものには「×」と答えなさい。

ア 「Ⅱ」の文においては、作り手は受け手の存在を意識しながら芸術を作るのだが、「Ⅰ」の文においては、受け手がいなくても、作り手だけで芸術は完成するとある。

イ 「Ⅰ」の文においては、作り手が芸術表現に向かうのは「失敗」や「悲しみ」などのマイナスの感情であるが、「Ⅱ」の文においては、「喜び」や「幸せ」が作り手の表現衝動であるとしている。

ウ 「Ⅰ」の文においては、芸術の受け手は作り手と同時代の人々に限られているが、一方で「Ⅱ」では両者は必ず違う時代の人々でなくはならないとある。

エ 「Ⅰ」・「Ⅱ」どちらの文においても、芸術とは作り手にとって意味があるだけでなく、受け手に共有されることで、受け手の人生にも意味を与えるものになるとある。

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

震災で妻と店を失った料理人、桜田源三（「源さん」）は、村田二郎（「ムーさん」）に頼まれて、限界集落 蛭原村の村おこしのために出店される、卵かけご飯専門店「ヒカルの卵」の店長として働くことになった。プレオープンを終え、いよいよオープンの日、源三はプレオープンの様子を思い返しつつ、仕込みに入った。

美味しい。

なんて素晴らしい響きをまとった言葉だろうか。

私はあらためて思った。この言葉は、私の全身の細胞を純粹な歓喜で震わせる福音であると同時に、私の内側で長いあいだ休眠していた料理人としてのDNAを、根底から目覚めさせてくれる魔法の呪文でもあったのだ。

私がお客さんに提供したのは、所詮、卵かけご飯だ。しかし、自分にできうる最良の方法を駆使して、その結果「美味しい」という台詞を頂けたのだから、私は厨房に立つことの喜びの粋を味わわせてもらえたに違いなかった。

昨日、痛感したのは、ようするに仕事の内容などは瑣末なことであって、大切なのは、その仕事でどれだけ人に喜んでもらえるか、だということだった。そして、常にそう考えてさえいられば、たとえ卵かけご飯の料理人であっても、お客さんからの「ご馳走さま」という言葉が沁みし、自分の口から自然と出る「ありがとうございます」の本当の意味するところも噛み締められる。「ありがとうございます」という感謝の言葉は、「喜んでくれて、私も嬉しいです。ありがとうございます」なのだ。つまり、料理人と客は、喜びのキャッチボールを楽しむ間柄なのである。

厨房での仕事は、愉しい。

少々腰が痛くとも、止められない。



こうして真新しい厨房に立たせてもらっている私は、なんだか生まれ変わったような新鮮な気分を持って余っていて、仕事をするのがいちいち照れ臭くて、**A** 鼻歌を唄いそうになる。けれど、それもわざとらしいから少し気が引けて、とりあえず、口笛などを吹いてみるのだった。やや控えめな音量で。

吹いた曲は、コニー・フランシスの「ボーイ・ハント」。死んだ女房が好んで聴いていた曲だ。「スローで、メロウで、モダンな雰囲気、素敵なのよ」と、私にお茶をいれながら女房が言っていたのを思い出す。その台詞の方がモダンだよ、と私は女房を見て思ったものだ。そして、この曲を聴いた後、女房はなぜかよく私のハーレーのタンデムシートに乗りたがったものだった。

私が最後に女房を乗せたのは、桜の季節のことだった。海をバックに桜を見られる高台の公園を目指してツーリングに出かけたのだ。あのとき、公園のベンチに座った私たちの頬をなでた海風のやわらかさと、女房が水筒から注いでくれた温かいほうじ茶の味は、昨日のことのように思い出せる。

**B** 精米機が止まって、厨房が静かになった。

静けさが耳を打つと、ツーリングをしたあの日、桜の樹々の向こうから風につけて漂ってきた遠い潮騒が、記憶の彼方から立ちのぼってくるようだった。

蛍原集落に移り住み、森のなかの隠れ家のような「ヒカルの卵」で働きながら、女房と一緒に余生を過ごせたなら……。うっかり私は、青臭いメロディーを口笛で吹きながら、年甲斐もなく感傷に浸ってしまった。と、そのとき、やたらと能天気な声が聞こえてきた。

「よお、源さん、おはようさ〜ん」

厨房から客席を見ると、プラスチックの黄色い箱を抱えたムーさんが立っていた。箱の中身は産みだての卵だ。

② 「おはようございます」

私は、ほろ苦い余韻を胸に残しつつ、挨拶を返した。

ムーさんは卵の入った箱を厨房へ運んでくると、業務用の冷蔵庫の前にそれを置いた。

「今日から本当のオープンだけでも、源さん、宜しくお願致します」

「いっしょにや」

③ どちらからともなく笑みを向け合い、そして両手を差し出した。ムーさんの分厚くてごわごわした働き者の手をがっちり握る。

「さあ、いよいよ、おそらく私の人生最後の冒険のはじまりだ。」

日本でいちばん見つけにくい山奥に建てられた、日本で唯一の卵かけご飯専門店の店長として、私はいったい何を成せるだろうか。冒険とは不似合いなムーミン顔のオーナーのもとで。

私は、自分に宣言するように言った。

「味には自信があるので、誇りを持って働かせて頂きます」

仕込みを終えて、オープンの十一時を迎えると、さっそくお客がやってきた。昨日のプレオープンに來られなかった、同じ集落の四人の男たちだった。

「いらつしやいませ」と、厨房の私。

「いらつしやい」と、客席で出迎えるムーさん。

「おう。さっそく喰いに來たぞ。俺らが一番乗りかい？」

長靴を履いた六〇年配の男がムーさんに訊ねた。

「んだ。記念すべき第一号だから、源さん特製の出し巻き玉子をサービスすつから」

ムーさんが私を見た。目で、いいでしょ？ と訊ねている。

④ まったく人がいっただらない。

私は苦笑をこらえ、小さく頷いて、厨房を振り返った。

すでに炊きあがっている「夢気分」は、ふっくらと匂いの蒸気を漂わせていた。味噌汁も寸胴のなかで温まっているし、漬け物もいい味に仕上がっている。卵は、客席のテーブルの上のザルにてんこ盛りにしてあって、食べ放題だ。

私は、**X** 感触を愉しみながら、丁寧に出し巻き玉子を作り、そして、三五〇円以上の価値を生み出すべく、しゃもじで切るようにして、ご

飯をふわりと器うつわによそった。漬け物を小皿にとり、味噌汁をお椀わんによそって盆ぼんに載せ、それをムーさんに手渡す。

「ほい。最高にうめえ卵かけご飯と、サービスの出し巻き玉子だあ。じっくり味わって下さい」

ムーさんが、自信満々の台詞と、能天気な笑顔でもって配膳はいぜんした。

最初は、「卵かけご飯なんて、じっくり味わうもんでねえべき。ガガツとかつこんで喰うのがうめえんだべ？」などと言っていた男たちだが、一口食べた瞬間しゅんかん、みなそろって目を丸くした。

「おお。何だコレ。やけにうめえな……」

「んだな。うちで喰うのとは、ずいぶんと違うぞ」

結局、男たちはそれぞれ卵かけご飯を二杯はいと、味噌汁と漬け物をペロリと平らげていった。もちろん、出し巻き玉子も絶賛された。帰り際きざい、最年長と思われる男が、レジで私に笑いかけてきた。

「源さん、美味うまかったよお。出し巻き玉子も最高だったな。小腹が空いたら、また喰いにくっからよ」

「ありがとうございます」

言いながら五百円玉を受け取って、一五〇円のお釣つりりを返す。

傍らかたわらのムーさんを見たら、嬉しさを隠し切れないといった風情ふぜいで破顔はがんしていた。

四人それぞれから代金を受け取り、彼らかれの背中に「ありがとうございます」と声をかける。

静かになった店内⑤に、沢⑥の音ねが忍しのび込こんでくる。

ムーさんがこちらに歩いてきて、右手を上げた。

そして私たちは、年甲斐もなくハイタッチを交かわしたのだった。

「源さん、いい感じだなあ」

「ですな」

「んじゃ、俺はいったん帰って、姫⑥さんたちの面倒めんどうみてくっから」

「はい」

「また後で、様子を見にくくつけども——」

私はムーさんの台詞に言葉をかぶせた。

「いやいや、大丈夫です。任せて下さい」

「あはは。んだな」

「ムーさんは、養鶏が忙しいんですから」

「でもよ、こつちも楽しいから、俺も手伝いてえんだもん」

もん、つて……。C 子供みたいな台詞を言うから、私はくすつと笑ってしまった。

「もちろん、それでしたら、よろこんで」

「んじゃ、とりあえず、そういうこつて。源さん、よろしくな」

「はい」

ムーさんは右手をちよつとあげると、悠々とした足取りで暖簾の外へと出て行った。

それから、満席とはいかないまでも、お客はぼちぼち入り続けた。八割は集落の人間だが、残りの二割は遠方からわざわざ足を運んでくれた人たちだった。

昨日、ムーさんは近隣に配られる新聞に折り込みチラシの広告を打っていたのだ。枚数は十万枚。どうやら、その成果が出ているらしい。チラシはB4サイズの黄色で、印刷はモノクロ。一枚差し込むのに三円五〇銭もかかったそうさ。つまり、三五万円をかけて宣伝したという計算になる。

チラシに書かれたキャッチコピーは、なかなか秀逸だった。

世界初？

たまごかけご飯専門店

## ヒカルの卵

誰も知らない山奥の、限界集落のさらに奥、  
静かな森を流れる川のほとりに、

「たまごかけご飯の専門店」をつくりました。

このお店、そう簡単には

見つけられないと思いますが、

運良く見つけられたあなたには、

おどろくほど美味しい

こだわりのたまごかけご飯を提供いたします。

味噌汁と漬け物がついて、

しかも食べ放題で、三五〇円です。

このコピーは、元編集者だった直子(注4)さんが考えてくれたそうだ。ど田舎(いなか)であることをむしろ売りにするという、逆転の発想がいい。見つけられるものなら来てごらん、といった含み(かく)のある挑戦(ちせん)的な文(もん)言(ごん)も洒落(しやれ)が利(き)いている。

コピーのほかに(注5)、ワカメ君(か)が描(か)いた絵地図(けい)が掲載(けい)されていた。絵地図には、蛭原集落で見られる野生の動植物のイラストや、店舗(てんぼ)の外観、そして店長(か)という肩書き(かたが)のついた私の似顔絵まで描かれていた。アナログなデザインと相まって、ずいぶんとアピール力のあるチラシに仕上がっているように思える。

今日、他所から来てくれたお客たちのほとんどは、そのチラシを手にしていただけだが、どうやら店に辿(た)り着くまでに、みな一度は道に迷って、蛭原集落の誰かに道を訊ねるハメになり、しかし、そういう小さな触(ふ)れ合いをむしろ楽しんでるようだった。しかも、彼らは、吊り橋(つりばし)をアトラクションのように楽しんでいた。わざと揺(ゆ)らして友人や恋人(こいびと)とはしゃいだり、橋から見下ろす一ノ沢の美しさ(か)に感嘆(かんとん)の声をあげたりしていたのだ。

森の隠れ家みたいな店ですね――。

こんな気持ちのいいところに、卵かけご飯の専門店をつくるなんて、洒落てますね――。

若いお客たちから、そんな贅辞をもらった。

もちろん、卵かけご飯の味は好評だった。プロの私の舌が太鼓判を押したのだから喜ばれるのも当然だが、しかし、お客以上に喜んでいたのは当の私自身かも知れなかった。卵かけご飯の味に驚いたお客たちの表情や、幸せそうな笑顔を見るにつけて、私の内側にはほっこりとした風が吹き抜けていたのだ。そして、風は、震災で店が潰れたあの日から沈殿し続けていた心の毒を、さらさらと粉のように吹き飛ばしてくれる気がしていた。

「ごちそうさまでした。少し遠いけど、また来ます――」。

会計のときに、老夫婦の妻の方がそう言ってくれた。私は「ありがとうございます」と言って、柄にもなく微笑みを返していた。その微笑みには、まったくと言っていいほど気負いがなくて、なんだかムーさんに似ているんじゃないか……、などと自分で思ったとき、ふと私は確信に近い思いを抱いたのだった。

⑦ この店、口コミで流行るかも知れない。

（森沢明夫『ヒカルの卵』より一部改変）

（注1） 福音：よろこばしい知らせや言葉。

（注2） 厨房：調理場。

（注3） 粹：もつとも純粹ですぐれている部分。

（注4） 直子さん：蛭原村の住人。

（注5） ワカメ君：蛭原村の住人。

問一 ――線Ⅰ「瑣末な」、Ⅱ「能天気な」の言葉の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「瑣末な」 ア 一見軽はずみに見える

イ 結果として現れてくる

ウ 物事を中心となる重要な

エ 取るに足りない小さな

オ 段々複雑になっていく

Ⅱ「能天気な」 ア 考えもつかないほど奇抜な

イ 誠実で前向きな

ウ 物事を深く考えない気楽な

エ おだやかで落ち着いた

オ 静かに暗く沈んだ

問二 ――線①「喜びのキャッチボール」とはどのようなものですか。具体的に説明しなさい。

問三 

A
---

C
---

 に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は一度しか使えません。)

ア じっくり    イ うっかり    ウ まるで    エ ついに    オ ふいに

問四 — 線②「私は、ほろ苦い余韻を胸に残しつつ、挨拶を返した」とありますが、ここに至るまでの「源さん」の気持ちとはどのようなもの

だったのですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久々の仕事に戸惑う自分を、鼻歌でごまかそうとして、思いがけず亡き妻のことを思い出して、元気だった頃の自分を取り戻し、どんなにづらい仕事でも誠実に取り組もうという気持ちになっていたところ、ムーさんが現れて、前向きな気持ちでムーさんの挨拶に応じた。

イ また仕事ができる喜びを抑えつつ吹いた口笛で、亡き妻を思い出し、妻と一緒に蛍原集落で働きながら残りの人生を過ごしたかったと叶わぬ夢を思い描いてしまい、せつない気持ちでいたところ、ムーさんが現れて、気持ちを切り替えることができないまま、ムーさんの挨拶に応じた。

ウ 思うように仕事に打ち込めない自分を落ち着かせようとして、亡き妻と過ごしたおだやかな一日を思い起こしたが、こんなだらしないことでは妻に申し訳がないという気持ちになって落ちこんでいたところ、ムーさんが現れて、情けなく思う気持ちのままムーさんの挨拶に応じた。

エ 懸命に仕事をする姿を見せるのが恥ずかしくて、いい加減な様子を装っていたが、亡き妻のことを思い出し、蛍原集落で一緒に働くはずだった妻の分まで精いっぱい働こうと決心したところ、ムーさんが現れ、妻を失った悲しみを抱きつつも、積極的に仕事に向かうべく、ムーさんの挨拶に応じた。

オ 自分の仕事に人に喜んでもらえることが嬉しくて、思わず口笛を吹いてしまったが、まだまだ働きたかったであろう亡き妻のことを思い出し、浮かれていた自分の軽はずみな行動を後悔していたところに、ムーさんが現れ、自分の愚かさを恥じつつムーさんの挨拶に応じた。



問五 ———線③「さあ、いよいよ、おそらく私の人生最後の冒険のはじまりだ」とありますが、「冒険」とは「源さん」にとってどのようなもの

のですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア プレオープンプレオープンの成功に満足することなく、たとえ専門外でも、新しいメニューメニューの開発や宣伝宣伝に積極的に関わって、お客の心をさらにつかみ、「ヒカルの卵」を成功にみちびくという目標を達成するということのもの。

イ 何もしないまま年老いて死んでいくのを待つのではなく、残された少ない時間の中で成し遂げられるかわからないが、「ヒカルの卵」を広めるため、広告という全く初めての仕事を身につけ、村を活性化させるという目標に立ち向かうということのもの。

ウ 亡き妻との思い出にひたって、過去を振り返りながら生きるのではなく、過去のことはずっぱり忘れ、ムーさんと一緒に商売を立ち上げ、必ず成功して裕福ゆふくになろうという目標を打ち立てるというもの。

エ 一人きりの気楽な人生を選ぶのではなく、面倒めんどろなことも多いかもしれないが、「ヒカルの卵」で働くことで村の人々の役に立ち、村人と関わりながら豊かな人間関係の中で生きて行くという目標に向かって努力していくということのもの。

オ 店や妻を失い、料理人をやめてしまった状況じょうきょうにとどまっているのではなく、成功するかはわからないが、ムーさんが立ち上げた「ヒカルの卵」に自分の力を精いっぱい注ぐという新しい目標に挑戦していくということのもの。

問六 — 線④「まったく人がいいつたらない」とありますが、なぜそう思ったのですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふっくらと炊けたご飯に温かい味噌汁、いい味に仕上がった漬物に食べ放題の卵と、客へのもてなしは揃っているのに、ムーさんはその上、出し巻き玉子までサービスしようとしているから。

イ プレオープンに来られなかった男たちを責めるべきなのに、ムーさんは、「記念すべき第一号だ」と彼らを持ち上げ、特製の出し巻き玉子までサービスして機嫌を取ろうとしているから。

ウ 「さっそく喰いに来たぞ」と偉そうな態度をとる男たちに対して、ムーさんは嫌な顔一つせず、むしろ丁寧に接客し、彼らを客として迎え入れてもいいか、わざわざ訊ねてきたから。

エ 店長である自分を差し置いて、最初のお客である男たちに対し巻き玉子をサービスすることを決めてしまったムーさんのことを苦々しく思いながらも、反対もせず、その通りに行うことに決めたから。

オ 「いらっしやい」と客席で出迎えたムーさんに対して、腹を立て、けんか腰になった四人の男たちをなだめるために、自分が腕をふるって、特製の出し巻き玉子をサービスしようと考えたから。

問七

X に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ものめずらしい    イ もどかしい    ウ 古めかしい    エ 懐かしい    オ あわただしい

問八——線⑤「沢さわの音が忍しのび込んでくる」とありますが、この描写によって源さんとムーさんのどのような様子が読みとれますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア お客に接していた時の緊張がゆるゆると解け、再び二人だけに戻って、静かに余韻よゐんをかみしめている様子。

イ お客の評価に対する不安がみるみる高まり、二人にとって店内の静けさが不吉に思えてならない様子。

ウ お客に喜んでもらえた充実感じゅうじつかんがますます強くなり、二人は互いに興奮こうふんが抑えきれなくなっている様子。

エ お客にほめられて自信がわいてきて、マイナスに思われた店の立地条件もプラスに感じられるようになっていく様子。

オ お客や豊かな自然に対する感謝の気持ちがわき起こってきて、店を立ち上げてよかったとしみじみと感じている様子。

問九——線⑥「姫ひめさん」とありますが、これは何を指しますか。本文中から一字でぬき出し、答えなさい。

問十——線⑦「この店、口コミで流行はやるかも知れない」とありますが、源さんがこの店がうまくいくと思った理由としてふさわしくないものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ村に住む人々に協力してもらって、アピール力のあるチラシを作ることができたから。

イ 道に迷って村人に道を訊ねるといふ触れ合いを持てたり、吊り橋をアトラクションのように楽しめたり、田舎いなかならではの体験をお客が楽しんできたから。

ウ プロとして店で料理を振る舞う自信を取り戻したことに、お客も気づいてくれたから。

エ お客の幸せそうな笑顔や「また来ます」という言葉に、喜びを感じられたから。

オ 自分がムーさんと同じように気負いなく自然に人々に応じることができるようになったから。

問十一「源さん」は卵かけご飯の店「ヒカルの卵」に関わることで、どのような気持ちの変化があったのですか。説明しなさい。

〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① 言葉をおぎなう。
- ② 部屋にプリントがサンランしている。
- ③ ゴツカンの地を訪れる。
- ④ 世間のフウチヨウを気にする。
- ⑤ 旅費を二人で折半する。
- ⑥ クラスの中心的な役割を担う。